

「ほんもの」におけるジェームズの芸術観

堤 千佳子

I

ジェームズが生涯において創作した短編小説の数は110編を越える。彼が『物語』(tale)と呼んだそれらの作品は1864年から1910年にかけて、つまり作家生活のほとんど全ての時期において書かれたものである。

ジェームズの短編作品はそのテーマによって、『芸術家もの』、『国際状況もの』、『幽霊・幻想もの』、『人生において何事かを成就し得なかった孤独な人間もの』の四つに分類することが可能である。ただし、一つの作品が必ずしも一つのテーマに貫かれているわけではなく、この分類ですべての作品をいずれか一つの範疇に入れることはできない。本稿で取り上げる「ほんもの」(“The Real Thing”)はこの分類に従えば、明らかに『芸術家もの』の範疇に入るが、この作品では作家ジェームズ自身の芸術観が明らかにされていることから、注目に値する作品である。

「ほんもの」の構想はジェームズの『ノートブックス』(*The Complete Notebooks of Henry James*)によって紹介されている。生活に困った退役軍人の夫婦が絵のモデルになりたいと画家を訪ね、採用したところ、本物の紳士・淑女であるはずの夫妻はそのモデルとしては全く用をなさなかったという、彼の友人の画家、ドゥ・モーリアによって知らされた実話を素に作り上げた作品である。¹⁾また、『小説の技法』(*The Art of the Novel*)においてもこの逸話は繰り返し、言及されている。²⁾ただし、後者においてはその夫妻と対照的にそれ以前からドゥ・モーリアのモデルをしていたプロの夫婦との比較についてまで述べられ、ジェームズがいかにして小説へ

と話を発展させていったかがより鮮明になっている。

II

語り手である『私』のもとにある夫妻が現れるところから、この作品は始まる。『私』は一流の肖像画家を夢見ている挿絵画家である。挿絵は生活の糧のために描いているのだが、彼の本当の野心は肖像画家として世に名を残すことである。心ならずも生活のために本来の自己の希望、あるいは心の中で描くあるべき自己の姿と反することを行っているという点では『私』とモナーク夫妻には共通点があると言えよう。

モナークという言葉は君主、独裁主権者、同類を圧するような人、という意味を持つ。この作品の場合、モナークという名は自己が他に対してどのような意味合いを持つか満足に理解していない、自己のままで十分であるとしか認識できていない、鈍感で、他人を圧迫するような人物を指していると考えられる。そんな夫婦が『私』のもとへと訪ねて来る。二人はお互いに自分たちの目的を『私』に告げる機会を譲り合っているように思える。二人の押し出しからして『私』はてっきり肖像画の依頼だと誤解してしまう。しかし「『押し出しの立派な人が著名の士であることはまずない』という皮肉な法則³⁾に『私』は前から気づいていたとされており、これはこの作品の伏線となっている。

この初登場の場面でのモナーク夫妻の描写の仕方は画家である語り手にふさわしく非常に描写的、絵画的である。

...with a dim smile that had the effect of a moist sponge passed over a "sunk" piece of painting, as well as of a vague allusion to vanished beauty. ...She looked as sad as a woman could look whose face was not charged with expression; that is her tinted oval mask showed waste as an exposed surface shows friction. The hand of time had played over her freely, but to an effect of

今では若くもなく、また経済的にゆとりのあるわけでもない、人生にやや疲れたような夫人の容貌を絵画に關係のある言葉を用いて、残酷なまでに的確に表現している。また表情(expression)に欠けているということも第一印象で読み取っているが、この正しさは実際にモデルとして彼女を描くときに証明される。

モナーク氏は退役軍人であり、紳士階級(gentlefolk)であるが、退役してから財産を使い果たし、生活のためにモデルになろうとしたということが、ここで明らかにされる。彼らはいばった口をきかないように注意はしているが、自分たちの立場、つまり紳士階級に属しているというプライドは捨て切れていない。そのため、自分たちのスタイルを利用してほしくはあるが、顔を描かれて他人にばれては困る、つまり、『私』とのモデルの取引を秘密にするよう望むのである。これはプロとして働く意識の欠如を表し、これが彼等がモデルとして不適格である一因となっている。また、雇い手である『私』の事も交際をするような対等の相手としては見なしていないのである。『私』も彼らは社交界に属する人間であるのは見て取っている。しかし、プロの眼で見ると夫人の方は“bad illustration”でしかあり得ない。挿絵のモデルというよりも、何かの広告に向いていると『私』は感じる。その場合、何かを表象する必要はなく、客の購買意欲を刺激するように、その秀れた容姿をさらしていればいだけである。相手の想像力に訴える必要も、何かになりきらなければならないという必要もないのである。ただ彫像のように、写真のようにじっとしているだけで事足りてしまうのである。こういった状況は、自らは何も働きかけず、環境に流されるままで暮らしているモナーク夫妻にはモデルよりもずっとふさわしい生き方である。彼等は環境に対して、能動的になったり、あるいは順応していくという能力に欠けている。その点では社会的弱者、敗残者なのである。

モナーク夫妻のこと、彼等の経歴、以前の生活といったことは奇妙なことに『私』にはすぐに看過されてしまう。彼らのその明白性は『私』に創

造意欲を刺激するような訴えをしにかけてはこないのである。『私』には画家としてのはっきりとした嗜好があるからである。

...the ruling passion of my life was the detestation of the amateur. Combined with this was another perversity—an innate preference for the represented subject over the real one: the defect of the real one was so apt to be a lack of representation. I liked things that appeared; then one was sure. Whether they *were* or not was a subordinate and almost always a profitless question. (317-8)

ここにジェイムズの芸術観が述べられている。芸術とは現実 (reality) を変化させたもの (transformation) であり、また、人生を再現したもの (representation) と考えていたジェイムズにとって彼の想像力、創作意欲、感受性に訴えてこないような『本物 (real thing)』は本当の (real) ものであっても価値はないものであった。『本物』は『本物』であるがゆえに、表現 (representation) の面で、『本物』を模倣するものに劣ってしまう。また、物事の本質を完全に知ることは人間にとって不可能である。更に芸術家に限らず、自己の本質を認知することすら至難の業である。どうしても表現されたもの (representation)、表面に現れたもの (appearance) を知覚するほかない。したがって『私』、あるいはジェイムズを含めて人間は物事の表層に注目せざるを得ないのである。ここでは、アマチュアを嫌い、プロを好むという点に、自分自身を含めた芸術家、そして、モデルとしてあるいは批評家として芸術に携わる者の厳格さをジェイムズは要求していると考えられる。

『私』はある出版社からの依頼で、ある作家の全集ものの挿絵を描く機会を与えられていた。一部の有識者以外の一般大衆からは無視されていた作家が、晩年になって賛辞を受けるようになり、豪華な全集が出版されることとなったからである。ここには作家に対する一般大衆の態度が皮肉な様相を帯びて述べられている。また、『私』はこの作家に関してはその著作に

ついてかなり読み込み、作中人物の研究にも余念がないが、いわゆる生活のためだけに引き受けているような作品については、本文も読まずに挿絵を描いているという、彼なりのプライドについても触れられている。読者は少ないかもしれないが、その作品の質については、生活のために挿絵を描いている大衆的な作品とは比較にならないこの全集の仕事をしていることで、『私』のプライドは充足させられている。

モナーク夫妻は自分たちが本当の『本物』であるということをつた一つよりどころとして『私』のもとを訪ねて来たのだった。『紳士』を描くのであれば、『本物』の『紳士』をモデルにするのが一番適当だと考えての事であった。そして彼は『私』に自分の不運を嘆くのである。“Gentlemen, poor beggars, who've drunk their wine, who've kept their hunters!”(321)彼の定義する『紳士』は、持ち物や生活習慣についての言及であり、精神面や、本来果たすべき義務 (noblesse oblige) については全く考慮に入られていない。また、モナーク夫妻は、後にモデルとして『私』のアトリエに通って来るようになった後も、自分たちがモデルをしている作品が置いてあるのに、眼を通そうともしない。彼らの表面的な上流階級振りを、ジェームズは内心好ましく思っていない。上流階級のこの知的な面での不活発さには『ある婦人の肖像』のウォーバートン卿についても同じような扱い方をしている。ヒロインのイザベルが好意を持ちながらも、許せないと思うのは知的なものや、貴族としての義務に関するウォーバートン卿の評価の仕方、捉え方がアメリカ娘、イザベルの価値観、価値基準に達していなかった事が一因である。ジェームズの嫌うイギリスの上流紳士のアマチュアリズム (“the everlasting English amateurishness”)⁴⁾への皮肉が盛り込まれている。

一方、プロのモデルのミス・チャームはモナーク夫妻と対照的な描かれ方をしている。

I scarcely ever saw her come in without thinking afresh how odd it was that being so little in herself, she should yet be so much in

others. She was a meagre little Miss Churm, but was such an ample heroine of romance. She was only a freckled cockney, but she could represent everything, from a fine lady to a shepherdess; she had the faculty as she might have had a fine voice or long hair. She couldn't spell and she loved beer, but she had two or three "points," and practice, and a knack, and mother-wit, and a whimsical sensibility, and a love of the theatre, and seven sisters, and not an ounce of respect, especially for the h. (321)

After I had drawn Mrs. Monarch a dozen times I felt surer ever than before that the value of such a model as Miss Churm resided precisely in the fact that she had no positive stamp, combined of course with the other fact that what she did have was a curious and inexplicable talent for imitation. Her usual appearance was like a curtain which she could draw up at a request for a capital performance. This performance was simply suggestive; but it was a word to the wise—it was vivid and pretty. ...it was so much her pride to feel she could sit for characters that had nothing in common with each other. (327-8)

彼女は何かの『本物』では決してない。しかし彼女には「絶対的な型」がなく、「奇妙で説明のつかない模倣の才能」があり、どんなものでも表現 (represent) することが可能なのである。彼女のこの才能についてカーテンの比喩が用いられているが、これは観客（ここでは画家である『私』）の要望に応じて引いて素晴らしい演技を見せてくれることを示唆しているが、これは当時、既に劇作へと関心を移していたジェイムズにふさわしい比喩である。

これに反して『本物』の『紳士・淑女』であるモナーク夫妻は常にそのまま、つまり彼等自身でしかない。夫人は「どうしようもなくごちなく」

(“insurmountably stiff”) で、彼女を描いたデッサンは写真か、そのコピーにしか見えない。彼女の姿 (expression) にも性格 (character) にも多様性、変化 (variety) が欠けているのである。“She was always a lady certainly, and into the bargain was always the same lady. She was the real thing but always the same thing.” (326) つまり、『本物』であるという事実だけを重視したために、それを見るものへの訴えかけという行為をないがしろにしてしまい、いつも「同じもの」 (“the same thing”) となってしまう。

その結果、見る人の感動を呼ばない事態になってしまったのである。『本物』とは単なる事実過ぎず、絵画として、あるいは小説までも含めて芸術全般はそれを鑑賞する人の心に何かを表現 (represent) しなければならないのである。「芸術の領域とは人生そのものであり、感じること、観察すること、想像することそのものである。」⁹⁾

この作品中で重要な人物がもう一人登場するが、ミス・チャームとは異なり、プロのモデルではなく、ろくに英語も話せないイタリア人である。『私』はその男がモデルとして役立つのに気づくのである。

Suddenly it struck me that this very attitude and expression [of the man] made a picture. (331)

He proved a sympathetic though a desolatory ministrant, and had in a wonderful degree the sentiment de la pose. It was uncultivated, instinctive, a part of the happy instinct that had guided him to my door and helped him to spell out my name on the card nailed to it. (332)

He was as good as Miss Churm, who could look, when requested, like an Italian. (333)

『私』にとって大事なものは画家である。『私』の想像力をかき立てる『何か』であり、それはそのものが『本物』であるかどうかということには関係していない。その『何か』とは言い換えればモデルとしての資質であるが、これはその人物の人格や経歴や身分には全く関連がない。皮肉なことに、この作品では『私』にとって、『本物』の紳士であるモナーク氏は『召し使い』のモデルとしてのほうが食指を動かされるのであった。

『私』にとって、挿絵の中の人物で誰がモデルであるかわかるのは最も嫌悪することであった。しかしモナーク夫妻をモデルにするとどうしても彼ら自身になってしまう。これは肖像画ではないのだから、画家としての『私』には唾棄すべきことである。画家としての技量を問われる問題になってしまいかねない。挿絵の場合、作品に即した人物造形をしなければならない。作品中にヒントはあるものの、どのような人物画を描くかによってその作品の魅力は左右されてしまう。また、挿絵が成功するかどうかによって、『私』がこの先この全集の挿絵全部を引き受けることができるのかも決まる。彼の生活の保障もかかっているのである。ひいては挿絵画家としての成功もかかっている。

結局『私』はこのイタリア人のオロンテをモデルに主人公を描くことにする。『私』は彼の中の“heroic capacity”に気づいたのだった。彼の身長不足の足りない部分は“latent”（内に潜んでいる）であり、彼の欠点は『私』の想像力によって何の問題もなくなり、イタリアの露店商人がパブリックスクール出身の主人公のモデルとなったのである。『私』は自分の選択についてモナーク夫妻の判断を恐れた。これは奇妙なことである。本来、雇い手である『私』があまり役に立たない、それどころか『私』の足を引っ張っているモデルに何故そこまで気を遣うのだろうか。「気の毒なほど礼儀正しく、いつまでも妙に不慣れた態度で私に頼り切ってしまうからである。」（“because in their really pathetic decorum and mysteriously permanent newness they counted on me so intensely.”）(336) モナーク夫妻は『私』が薦めた他の画家のところへ行っても全く不人気であった。どこの画家のところでもただあるがままの姿で立っているだけではモデル

としては役に立たない。それが実証されているにも関わらず、自分を頼り切っている夫妻に対して『私』は拒絶することができないのである。

『私』はモナーク夫妻をどうするかについて他人の力を借りることにする。批評家の友人に自分の作品を判断してもらうのである。ホーリィは画家ではないが、秀れた批評眼を持っている。ここにジェイズの皮肉な面が現れている。画家でありながら、自らの絵の才能はなく、代わりに他人の作品の批評をすることをなりわいとする人物。ジェイズ自身は作品を創作しながらも、さまざまな作家の批評をしている。そんなジェイズだからこそ小説と絵画の違いはあっても芸術に関するこの作品は生きて来るのである。

ホーリィは『私』の望みどおりの批評を与える。彼はモデルのタイプが悪いのだと断じる。彼は『技術の問題、筆の使い方、明暗の神秘』(“the question of execution, the direction of strokes and the mystery of values”) (338) 以外には何一つ論じない、つまり技術的な面だけを論じる批評家であるが、『私』の作品についてはモデルの質について批判しているのである。さらに彼はこのモデルは「ひどくつまらない」(“stupid”) (338) 人物であると断定する。しかし『私』はモナーク夫妻のために弁明する。ホーリィは『私』の最近の作品の質の低下はモデルのせいだと断言する。一般大衆や、出版者や編集者といった「もの」(“such animal”) (338) のために仕事をするのではなく、「わかる人」(“coloro che sanno”) (339) のためにすべきだと忠告し、『私』が『私』自身のためにまっとうな仕事をするのができないならせめて彼のためにしてくれとまで懇願する。ここにもジェイズの芸術やそれに関わる人間への視線が明らかにされている。芸術とは誰のためのものなのだろうか。この一節だけを見ると、これは選ばれた者のための者ということになる。

この後も『私』のもとを訪れて来るモナーク夫妻の姿はその通俗性を増し、『私』の感情にも生活にもその負担を拡大してくる。まるで「宮廷の次の間で辛抱強く控えている廷臣」(“a pair of patient courtiers in a royal ante-chamber”)(339)のようにひたすら自分の出番を待ち続けている。厳寒

期には暖を取るために来ているような彼等に「慈善の対象」(“objects of charity”) (339)としての感情を抱かずにはいられなくなる。それでも彼等を首にするにしても冬が終わってからと考慮している。モナーク夫妻は『私』に対して雇い主として奉ってはいらぬものの、対等に交際する相手ではないという態度が見え隠れする。しかしながら、実際には『私』の情けにすがらざるを得ない。ここでの彼等は“stupid”のもう一つの意味、『愚鈍』を表している。「ものを見る眼を養うところであるスタジオ」(“A studio is a place to learn to see.”) (340)ではこのような人物に用はないのである。そこで『私』は「彼等の傷ついたプライドに同情するどころか、できるだけ教訓を与えてやろうという気になって」(“Far from pitying their wounded pride, I must add, I was moved to give it as complete a lesson as I could.”) (341), モナーク夫人にお茶の用意をし、それをモデルをしているオロンテにも運ぶよう依頼する。つまり、『本物』の『淑女』である彼女に『召し使い』の役を振ったのである。さらに彼等が内心軽んじているオロンテにお茶を運ぶように命じることで二重に彼等のプライドを傷つけることになる。夫妻は「暗黙の意志の探り合いを行った」(“some mute telegraphy passed between them”) (341)が、少佐の「明朗な賢明さ」(“cheerful shrewdness”) (341)が従うように妻を促すのである。たとえプライドを傷つけられようと雇い主を怒らせたくない、職を失いたくないとの思いからである。

『私』はモナーク夫妻を庇護し続けたために、自分自身が失職の危機にさらされることになる。彼等をモデルにした挿絵が出版社の要望に添えなかったためである。ここにいたって『私』はプロのモデルのミス・チャームとオロンテを主人公に仕事にかかる。モナーク少佐はオロンテがパブリックスクール出身のイギリス紳士のモデルに採用されたと知ると非常なショックを受ける。『本物』の『紳士』である自分こそが挿絵においても『紳士』のモデルにふさわしいと自認していたためである。それに対し、『私』はついに最終宣告を突き付ける。「あなたたちのために破滅させられてはかありませんよ。」(“I can't be ruined for you!”) (342) この場合の“be ruined”

という言葉は経済的な意味合いだけではなく、挿絵画家、あるいは彼の本来の希望である肖像画家、ひいては芸術家としての彼のキャリアの破滅を表わしている。そして『私』は改めて芸術の皮肉を認識するのである。「当てにならない芸術の世界では、この上もなくお上品な人であっても造形的には（モデルには）なれないこともある。」（“...in the the deceptive atmosphere of art even the highest respectability may fail of being plastic.”）(343) “deceptive” という語は『人をだますような、当てにならない』を表すが、芸術が“deceptive”であるというのは、実物を眼に見えたままの姿を表現するのが芸術ではないというジェイムズの考えを表している。

モナーク夫妻は『私』に最後通告を突き付けられても、依然として『私』のアトリエへ通ってくる。

They had accepted their failure, but they couldn't accept their fate. They had bowed their heads in bewilderment to the perverse and cruel law in virtue of which the real thing could be so much less precious than the unreal; but they didn't want to starve. (345)

彼等の失敗とは、芸術に対し、『本物』であるということを武器に挑戦し、敗北を喫したということである。ただ、自己の価値判断のみを基準とし、社会、あるいは芸術という他者に盲目的であったのがその原因である。しかし、彼等はそれを運命として受け入れることはできなかった。『本物』より『偽物』が貴重であるという「思いどおりにならない、つむじ曲がりて残酷な法則」(345)には屈服しても、そのために『私』のアトリエを完全に去ることは食べて行けなくなることを意味していた。また、彼等にとって最後の砦である『私』との関係が切れるということは、彼等の存在価値に関わる問題である。『本物』であることに価値がなければ、モナーク夫妻の存在意義がなくなってしまうからである。『本物』であることだけを主張してきた彼等はずいには役割交換を申し出る。“If my servants were my models, then my models might be my servants. They would reverse

the parts—the others would sit for the ladies and gentlemen and *they* would do the work.” (345)

『私』は「彼等を喜ばすために」(“to oblige them) (345) 1週間だけ猶予を与えて、お金で彼等と縁を切るのに成功する。モナーク氏は自分の境遇を「紳士であったものが、今では乞食に成り下がってしまった!」(“Gentlemen, poor beggars,”) (321) と嘆いたが、実際彼等は他人の情けにすぎることしかできないのである。『私』が紹介した他の画家のところでも全く人気がなかったことから、彼等にはモデルとしての商品価値がなかったのである。芸術の前では芸術こそが君主(monarch)であり、モデルが君主であってはならないのである。しかし彼等はそれに気づかなかったのである。

『私』は全集の残りの仕事も引き受けることになったが、友人のホーリィに言わせると『モナーク夫妻は私に永久に消えない傷を負わせ、私を誤った方向へと導いてしまった』(“Major and Mrs. Monarch did me a permanent harm, got me into false ways,”) (346)。この「誤った方向」(“false ways”)とは何を指しているのだろうか。複数形が使われていることから、たった一つの結果だけを意味しているわけではない。『私』の本来の希望であった一流の肖像画家になれなかったこと、二流の仕事しかできなくなり、挿絵画家としても好ましくない結末を迎えることになったこと、画家としての評判に芳しくないものが残ったことなどを含んでいるのだろう。しかし『私』は「もし万一それが本当だとしても、その代価を支払ったことに私は満足している。—その思い出に対して。」(“If it be true I'm content to have paid the price—for the memory.”) (346) と最後の句が結ばれている。ここで仮定法未来が用いられていることに注目すべきである。つまり、『私』はホーリィの意見が全面的に正しいと思っているわけではない。『私』は『私』なりの信念を貫いたことに後悔していないことを最後に宣言しているのである。

III

この作品ではジェイムズの創作のキーワードの一つである『本物』(“the real thing”)がテーマとなっている。また、それにからめたジェイムズの芸術観が述べられている。見かけがいくら『本物』らしくとも、芸術家の創造性に訴えてこないような、インスピレーションをかき立てないようなものは、『本物』ではないのである。芸術とは人生を再現し、表現する(“represent”)ものであって、模倣するものではない。したがって、デッサンか写真のようなモデルが対象では何も生み出せないのである。柔軟性や多様性があり、人生や実物を“transform”させるものが必要とされるのである。「芸術の領域とは人生そのものであり、感じ取ること、観察すること、想像することそのものである」⁹⁾というジェイムズの定義に従えば、モナーク夫妻はモデルとしては不適格なのである。語り手である『私』はこの『本物』の世界と『見せかけ』(“appearance”)の世界の存在価値を認めていた。そしてジェイムズの芸術を扱った他の作品の主人公たちと同じようにこの二つの世界の間で軋轢に苦しみ、最終的には敗北し、殉教していくのである。

ただ、最後の句で「後悔していない」と述べているのは、語り手(つまりジェイムズ)がイギリスの中産階級に特有の想像力の無さ、固定した因習的な考え方や価値観などを批判する一方で、落ちぶれ、侮辱されながらも常に礼節を失わないモナーク夫妻の態度に敬意を表し、『モデル』としては役に立たず、かえって語り手の足を引っ張ったが、人生の皮肉な一場面を見せてくれた夫妻に暖かい視線を向けていることも否定できないのではないだろうか。

また、語り手である『私』に関すれば、芸術という“deceptive”な世界に魅せられて、肖像画家を夢見ながら、挿絵を描くことによって生活を支えている。生活と芸術とは本来相いれないものではあるが、ジェイムズの他の作品の主人公とは異なり、経済的に援助してくれるものがいなければ

いたしかたないことではある。この相違は舞台がイギリスとアメリカと異なっていることに関連してくる。というのはアメリカが舞台の作品の場合、まだ世に認められていない芸術家にはパトロンがいて経済的に支えられているから、ひたすら芸術に専念することができる。しかしこの作品では生活のための挿絵描きの結果、肖像画家としての将来を自らの手で閉ざしてしまった。彼もまた芸術という世界に惑わされてしまった一人である。彼は肖像画家としては何を目指していたのだろうか。肖像画とは、モデルを画布に写し出したものである。それは写真とは異なり、ただモデルの姿をそのままに写せばいいものではない。そこにはモデルとなる人物の本質、陰影のようなものが含まれなければならない。印象が込められなければならないのである。「小説とは人生についての個人的で直裁的な印象である。」⁷⁾とジェイムズは述べているが、この場合、小説と絵画を置き換えてもかまわないだろう。絵画とはその人物についての画家の得る個人的で直裁的な印象である。ジェイムズは小説と絵画の類似性について述べているが、絵画が写真のように単に現実を写すだけであってはならないように、ジェイムズにとって小説もまた、現実を写実するだけのものではなかった。「人生そのものの色彩を捉える」⁸⁾ものでなければならなかったのである。この「ほんもの」という作品は芸術と人生の関わりの皮肉と哀歎だけでなく、ジェイムズの芸術観を表明しているという点で印象に残る作品である。

《注》

- 1) Leon Edel, Lyall H. Powers (ed.); *The Complete Notebooks of Henry James* (New York: Oxford University Press, 1987) p.55-56.
- 2) Henry James, *The Art of the Novel* (New York: Charles Scribner's Sons, 1962) p.283.
- 3) Henry James, "The Real Thing". *The Novels and Tales of Henry James* vol.18 (New York: Charles Scribner's Sons, 1937) p.308.

以下の引用は全てこの版によるものとし、ページ数のみを本文中に記すことにする。

-
- 4) Edel, *ibid.*, p.55.
 - 5) Henry James, 「小説の技法」(岩本巖訳)『ヘンリー・ジェイムズ作品集8』(国書刊行会, 1983) p.111.
 - 6) 「小説の技法」 p.111.
 - 7) 「小説の技法」 p.98.
 - 8) 「小説の技法」 p.118.